

9 体 育 科

佐藤直美・今村昌禎

1. 研究テーマについて

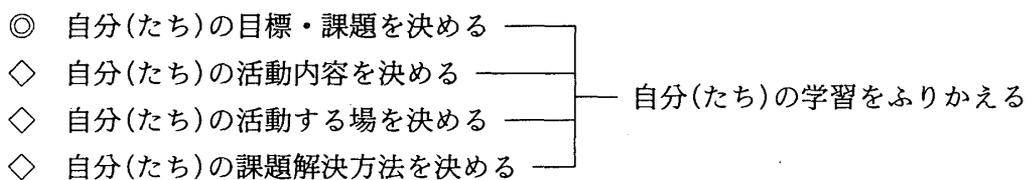
(1) 「自立に向かう子どもたち」の姿 <3つの『り』>

- ① 運動へのこだわり = 感性や情操を生かしながら、受け身ではなく、運動にこだわりを
(=自主的な問題 解決能力) もって(没頭して)取り組み、主体的に課題を追究している姿。
- ① 友だちとのかかわり = 友だちの演技や動きに声援や励ましを送ったり、相手との話し合
(=豊かな人間性) いの中で、問題や課題を解決したりして、共に高まり合おうとしている姿。
- ③ 生活への広がり = 学習した事柄を生活スポーツとして、ふだんの暮らしの中に、積極
(=たくましく生きるための健康や運動) 的に生かしている姿。

(2) サブテーマ「自分(たち)で決める場を大切に」のとらえ

運動を手順どおり、指示どおりにこなして、ただ技術を身につけるだけでなく、自分(たち)なりに納得して手順を踏んだ取り組みを行ったり、自分(たち)の発想で運動にかかわったりしていくということが自立に結びつくと考えられる。

そこで、体育科の学習において、子どもが「自分(たち)で決める」場を次のように考えた。



※ これらの4つの自己決定の場をいつも学習課程の中に位置づけるというのではない。単元の特性や学年(運動経験)、個々の目標・課題のもち方によって、2つや3つの場合もあり得る。特に、目標・課題をはっきりともって運動に取り組む姿勢が大切であるので、「自分(たち)の目標・課題を決める」場を◎とした。

2. 基本的な考え方について

体育は、運動技術の習得や運動の楽しみ方を味わう上で、人間関係が大きく左右する教科である。運動の特性に関係なく、グループやチームの人間関係によって、好きになったり、嫌いになったりもする。つまり、肯定的にとらえると、運動を通して、より望ましい人間関係を築き上げることの

できる教科であるといえる。また、生涯に渡って、運動・スポーツにかかわり、より豊かで健康的な生活を築いていくための基礎を培うという社会的役割を担っている教科でもある。それを自負して教科学習にあたりたい。

(1) 運動・スポーツを通して豊かな人間性を育む

競争スポーツが生活文化として確立するには、相手を打ち負かすところに意味が置かれるのではなく、勝者も敗者も、強者も弱者も互いに認め合い、しかも、それぞれのよいところや個性を存分に発揮し、高め合うことの意味や価値をみんなに共有されることが必要であると考え。「人を思いやる気持ち」「互いを認め合う気持ち」を根底にした自己実現の在り方を追究していきたい。

(2) 運動の学び方の習得を図る

生涯体育・スポーツの実践力は、子どもが主体的に運動に取り組む中で育まれると考える。子どもがこだわりをもって運動に取り組み、実感を伴って納得するという過程が重視されるべきであろう。また、一人ひとりがこだわりをもって、取り組むためには、めあてが内発的に動機づけられる方が望ましい。学び方を習得していくことは、学んだことを生活に生かそうとする力として、必要ではないかと考える。

3. 授業づくりにおけるポイント

(1) 子どもの願い・欲求を満たす「運動との出会わせ方」

- ◇ 子どもの実態を把握し、子どもの願い・欲求を満たすという側面を大切にしながら、教師が教えたこと・気づかせたい価値に結びつけて、授業の方向づけを図る。
- ◇ 学習意欲の継続や学習の見通しをもつために、目標の明確化を図る。

(2) 自分なりに発展しやすい「学習課題の設定」

- ◇ 具体的な手だてが見つかる、達成の可能性のある自分なりの学習課題をつくれるように導く。(授業前・授業中)
- ◇ 自分の運動(学習課題)がどうだったか一つひとつ記録させ、次のやりたい運動(学習課題)が見つけれられるようにする。

(3) 自己決定できる「場」や課題解決のための「活動時間の保障」

- ◇ 自分にとって、何が、どれが効果的なのか、自分のからだで試して納得する授業過程を設定する。
- ◇ ある程度運動のしくみやゲームの方法が分かったら、自分なりに考えた方法(運動づくり・ルールづくり)を試す場や課題解決のための時間を保障する。

(4) 学び合い、高まり合う「集団づくり」

- ◇ 学習材に応じたグループを組織したり、チームを編成したりする。
- ◇ 個のよさを認め合い、互いに思いやれる集団の雰囲気づくりに努める。

(5) 個人内の伸び、集団内のかかわりをみとる「評価」

- ◇ 「できばえ」に対する評価を「自己実現」という視点から行い、昨日の自分より今日の自分というように、個人の中での向上に喜びを感じることができるよう働きかけを行う。
- ◇ 集団(グループやチーム)内のかかわりが、成果としてみとれる評価を工夫する。

(6) 学習したことが活かされる「運動の生活化への導入」

- ◇ 学習したことが次のステップとしてどのように活かされるか明確化する。
- ◇ 学習したことが授業以外の場でも試したり、発展したりするような環境づくりをする。

4. 成果と課題 - 「自立に向かう子どもたち」の姿から - (◇=成果, ◆=課題)

(1) 運動へのこだわり

◇ 運動の特性を考慮しながら基本的な学習の枠組みをきちんとし、後は子どもたちが課題・活動内容・活動する場・課題解決方法を決定し、運動に取り組み、学習を繰り返す支援をしていけば、運動に没頭して取り組んでいた。

自己決定の場の積み重ねは、運動の学び方の習得にも大きな影響を与えていた。

◇ 子どもたちが自分たちなりの運動を創り上げる思いを大切にしていくと、生き生きと学習に取り組んでいた。

◇ 子どもたちは、運動のコツを自ら見つける場や時間を保障していくと、それを意欲的に習得しようとして取り組んでいた。この点から、「分かる」と「できる」が統合された学習過程をさらに分析し実践に結びつけていきたい。

◆ しっかりと自分らしさを見つめた上で学習課題や課題解決の場を設定できなかったために、途中で無理が生じてしまったことから、もっと自分を見つめる場や時間を保障する必要がある。

◆ 学習のふり返りの場で、「自己実現」の視点から評価を行うようにしていったので、個人の中での喜びを感じ取っていたが、運動技能面で、まだ他とのマイナスイメージでの比較をしまっている子どもがいた。基本的な運動技能を身につけていくステップをもっと子どもの視線で分かりやすく見通しがもてるものを創り上げていきたい。

◆ これから授業時間数も削減されていくので、各学年の運動技術の系統性をはっきりさせ、精選した単元構成や学習の展開を考えていきたい。

(2) 友だちとのかかわり

◇ 集団で互いのよさを認め合ったり協力したりしながら、運動を創り上げる喜びを感じ取っていた。

◇ 互いに認め合った個々のよさを全体化していく場を保障していくと、共に高まり合おうとする姿がよく見られた。

◆ ゲームなどで競い合う場面では、勝敗の結果にこだわり過ぎる面がまだ見られた。競い合う相手やチームの存在のありがたさや結果を導く過程の大切さを学ぶ場の工夫が必要である。

◆ 友だちの存在の温もりや大切さを体感する意味で、子どもたちどうしの心と体の温もりを味わう場を増やしていきたい。

(3) 生活への広がり

◇ 自分の体をしっかり見つめる場を設け、見つめたことを温めていくと、学習の場以外でも意識的に運動に取り組もうとしていた。自分の体を見つめる場をもっと増やしていきたい。

◆ 学習で身につけた力をふだんの暮らしの場に活かしていくように、関連づける取り組みの入口がなかなかつかめなかった。それと同時に、分析していくことも難しかった。

◆ 休憩時間に使用できる運動の場や用具にまで、学習の発展性を考慮したものにしていく必要がある。